
滅星児

沢渡 縁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

滅星児

【Nコード】

N4916D

【作者名】

沢渡 縁

【あらすじ】

とある世界で繰り広げられる戦争。ある日、戦火に巻き込まれた集落から逃げ出した少女リコは、敵国の少年タキと出会う。『戦争が生み、残すものは何か』をテーマに二人の少年少女が生きる戦乱の日々を描いた作品です。

1

プロローグ

とある世界のお話。

グランバドル大陸の南西に「サラン族」と呼ばれる少数民族が住む未開の地がある。

東方の軍事国家「クオース」は、この土地に眠る豊富な資源に目を付け、

サラン族に対し宣戦布告、侵略を始めた。

サランの族長バルオンⅡラッセルは徹底抗戦を宣言し、部族の戦士達を率いて戦線に立った。

開戦当初こそ両軍一步も譲らぬ大混戦であったが、強大な兵力と最先端の技術を有するクオース側が徐々に押し始め、点在するサラン族の集落は一つ、また一つと

戦火に包まれていくのだった。

一年後。

最前線からほどなく南に位置する深い森の中を、一人の少女がクオース兵に追われ逃げていた。

少女の名は、リコ。

褐色の肌に黒髪。十二歳のこの少女は、族長バルオンの一人娘である。

対してこれを追いかけるクオース兵もまた、一人。

リコと同じ年頃のこの少年兵は、銃口に短剣を取り付けた「剣銃」と呼ばれる武器を構え、前を走るリコに狙いを定めながら後を追っている。

少年の名前は「タキ」といった。

創世暦1135年。

その奥深い森の中で、

この物語は幕を上げる…

第1章…開戦

(1)

ガサガサガサ…

足元に生い茂る長い草を掻き分けながら、リコは懸命に走っていた。

体が、重い。

走りながら後ろを振り返ると、つい先程まで彼女が暮らしていた集落は

既に業火に包まれていた。

黒煙が立ち昇り、草木の焼ける匂い混じって、人々の泣き叫ぶ声が聞こえる。

「くっ…」

顔を歪ませて再び前を向くと、逃げる際に左肩に受けた銃傷がズキリと痛んだ。

この周辺の地理は知り尽くしている。

本来ならばクオース兵ごときに遅れを取るリコではないのだが、走る度に左肩を

襲う激痛が、彼女の足を鈍らせていた。

「…ッ!!」

ふいに長草に足を取られ、リコは前のめりに倒れこむ。

次の瞬間、

チュイイイインッッ…

転んだ彼女の頭上を、一発の銃弾が通過した。
倒れていなければ腿を貫通しているところだ。

「フウウウツツ」

一つ大きく短い深呼吸をすると、リコは勢い良く飛び起きた。

「!?!」

おかしい。

再び走り出そうとしたところで、異変に気付いたリコは足を止めた。

追っ手の気配が消えている。

後ろを見ると、先程まで彼女を追いかけて来ていたはずのクオース兵の姿がない。

諦めたのだろうか。

いや、違う。

どこからか、ただならぬ殺気を感じる。

(すぐ近くに、いる…)

素早く腰に差していた短剣を抜き、身構える。

ドクン、ドクン…

空気がピリピリと張り詰めていく。

静寂の中、自分の鼓動だけが耳に響く。

ナイフを構えたままそろりと後ろに足を踏み出した瞬間。

「…ウグッッ！！」

突然、背後の茂みから突き出された二本の腕が、リコの首を締め付けた。

ドスン！

「…かはッッ…！」

締め上げられたまま、硬い地面に叩き付けられ、リコの口から乾いたうめき声上がる。

短剣が手から離れ、軽い音を立てて転がった。

呼吸ができない。

「フツ…！フツ…！」

獣じみた荒い息を吐きながらリコの上に馬乗りになったクオース兵は、
なおも激しく彼女の首を締め上げる。

もがくりコの目に、自分の首を絞めるクオース兵の姿が飛び込んできた。

（…子供…？）

もうろうとした彼女の視界に映し出されたのは、自分とさほど変わらぬ
年頃の、まだあどけなさの残る少年の顔だった。

しかしその顔は泥土と返り血に汚れ、カッと見開かれた両眼は真っ赤に
血走っている。

狂人染みた形相だ。

「…グッ……あ、…悪魔…め……！」

次第に薄れゆく意識の中、かすれ声を搾り出したリコの頬に、ぽたりと何かが落ちた。

(…な、…なみ……だ…?)

悪魔と呼ばれた少年が、泣いていた。

「殺らなきゃ…殺らなきゃ殺られる…！これは『戦争』なんだ…ッ
！！」

リコの首を絞めながら、少年兵タキは呟く。

両腕がブルブルと震えているのは寒さの所為ではない。

人を、殺そうとしているのだ。

だんだんと、少女の抵抗が弱くなる。

その時。

「やめろっ！！」

ゴスッ！

突然、怒号と共にタキの後ろから姿を現した青年が、手にした槍の柄で力任せに
タキの頭を殴打した。

「うぐっ…」

不意打ちを喰らったタキは意識を失い、ドサリ、と地面に倒れる。

「リコ……リコッ！しっかりしろ！」

青年がそっとリコを揺さぶる。

「…う……マ…マサラ…？」

ほどなく意識を取り戻したリコは目の前の青年の名を呼んだ。
マサラと呼ばれた褐色の肌の青年は意識を取り戻したリコに安堵の
表情を浮かべる。

「もう大丈夫だ。お前の集落が攻撃を受けたと聞いてとんできたんだ」

「マサラ…村が…！クオースに…！！」

言いかけるリコをマサラは優しく制した。

「分かってる…話は後だ。とりあえず俺達の集落まで行こう。…立てるか？」

「うん…大丈夫」

ヨロヨロと身を起こしながら、リコは傍らに倒れているタキを見る。

「マサラ、この子…どうしよう」

「……」

マサラは無言で短剣を拾うと、タキの方へ歩み寄っていった。

(2)

クオース軍第三小隊作戦会議室。

カリムⅡスレイン中尉は、苛立った表情で前線からの報告を待っていた。

端正な顔立ちに、ブロンドの髪が揺れている。

そもそも、彼は今回の戦争には最初から異を唱えていた。

一方的な、侵略。

いくら敬愛する上官の命令とはいえ、何の罪もない先住民の土地を攻撃し、占拠するなど…

「…一雨、来るかな」

手にしたカップに目を落とし、ポツリと呟く。

いつの間にか、空には暗雲が立ち込め、今にも大粒の雨が落ちてきそうな様子だ。

「失礼します!!」

カリムの眩きに応えるかのように、一人の兵士が入ってきた。

「戦況は」

穏やかな、しかし威厳のある声でカリムが尋ねる。

「いちいち聞かずとも窓の外、遠くに見える黒煙を見れば結果は分かるのだが。」

「はっ！ 予定通りヒサの集落を落とし占拠を完了致しました！」

「ピシリ、と敬礼をした兵士から、予想通りの返答が返ってくる。」

「うむ。我が軍の被害は」

「はっ！ 死者は無し！ 軽傷者が二名であります！ それと…」

「そこまで言って、兵士はやや言いにくそうに言葉を切った。」

「どうした？」

「は…輸送部隊所属のタキⅡエイジスが消息を絶っております」

「タキが…？」

カリムの細い眉が、ピクリと動く。

「ヒサの集落から逃げ出した娘を追って隊から離れたようです。現在搜索隊を向かわせていますが…」

「分かった…。引き続き搜索を頼む。御苦労だった」

「はっ！！失礼します！」

再びピシリと敬礼をとり、兵士は部屋を出ていった。

ふう、と深い溜息をつきながら、カリムは椅子に腰を降ろした。

やはり、行かせるべきではなかった。

手にしたカップに視線を落とす。
すっかり冷めてしまったコーヒーが、ゆらゆらと所在なさげにゆれている。

「タキ…」

ぼそりと呟いた彼の声は、突然響いた雷鳴にかき消された。

背後の窓から外を見ると、分厚い雲に覆われた真っ黒な空から、ポツポツと

大粒の雨が降り始めている。

妙な胸騒ぎを感じながら、カリムは冷たいカップを口に運んだ。

(3)

ピチヨン。

額に落ちた雨粒で、タキは目を覚ました。

「…う…」

どれくらい意識を失っていたのだろうか。

ズキズキと痛む後頭部を押さえながら、ゆっくりと上体を起こす。

（俺…生きているのか…？）

不思議な感覚だった。

不覚にも敵の目の前で気絶してしまったというのに、まだこうして生きている。

何故殺されなかったのだろう。

（…まあ、いい）

ノソリとその場に立ち上がる。
辺りを見ると、随分と薄暗い。いつの間にか降り出した雨で、迷彩服はびっしょりと濡れていた。

(帰らなきゃ：カリムが心配している：)

冷たい雨に身震いしながら、タキはヨロヨロと歩き出した。
と、その時。

遠くの方から、複数の人影がこちらに向かって歩いてくるのが見えた。

とっさに近くの茂みに身を隠す。

近付いてくる一団が、敵なのか味方なのか分からない。味方であるなら問題はない。

敵であれば：

ゴクリ、と唾を飲み息を潜める。

やがて一団はタキの隠れている茂みのすぐ近くまでやってきた。

男の声が聞こえる。

「急げ！今ならまだ間に合う」

先頭を歩く男が、後続を急かしている。

その頭に、長い二本の鳥の羽が刺さっているのが見えた。

（サラン兵だ！）

ドキリと心臓が高鳴り、タキの体が硬直する。

サラン族の男たちは頭に鳥の羽飾りを着け、その長さや色によって身分を分ける習慣がある事を、タキは知っていた。

ドクン…ドクン…

鼓動が速くなり、顔から血の気が引いてゆく。

「…待て」

一団の最後尾にいた大男が、先頭を急ぐ男に声を掛けた。

その大男の頭には、一際長く、暗闇でもはっきりと分かるほどの金色の羽が輝いていた。

（…バルオン…！！）

タキの鼓動が、さらにその速度を増す。

バルオンⅡラッセル。

サラン族の長にして『密林の悪魔』の異名で恐れられる歴戦の戦士。開戦当時、数え切れぬ程のクオース兵がこの男に戦いを挑み、命を奪われた。

身の丈二メートルはあろうかと思われる巨体に、独特のタトゥーが施された黒光りする腕。

無数のシワと傷が刻まれた、迫力のある顔。

手には彼等特有の巨大な刃を取付けた槍を持っている。

一団の中でも飛び抜けた威圧感を放つその男は、静かに皆を制した。

（バルオン…！ やっと… やっと見つけたぞ…っ！…！）

タキの瞳が、怒りに染まっていく。

「…ヒサは…落ちたようだ。メコンの集落へ向かうぞ…」

「…！？」

突然のバルオンの言葉に、周囲の男達はどよめきの声を上げた。

「馬鹿なっ！ここまで来てヒサの仲間を見捨てるのか！！」

先頭にいた男がバルオンに喰ってかかる。

「村にはまだ戦っている仲間もいるはずだ！長は彼等に死ねというのか！！それに…ヒサには長、あなたの妻と娘もいるのだぞ！！」

男の言葉に、周囲の者達が頷く。

しかし、バルオンは低く落ち着いた口調で皆に伝えた。

「ヒサの仲間達は皆…殺された。リコだけは逃げ延びたようだ。今…ヴァヌの声が聞こえた」

その言葉に、今度は男達から驚愕の声が上がる。

「…おお…お…」

「くっ……間に合わなかったのか…！」

「サエル…コリエ……う…うう…」

地にひれ伏し、嘆く男達。

古来より、サラン族が崇拝する神、ヴァヌ。

代々一族の長たる者だけが、その声を聞くことができるという。

バルオンの言葉は、それを意味していた。

泣き崩れる者。

深く目を閉じ、空に祈りを捧げる者。

呆然と立ち尽くす者。

その様子をしばし黙って見つめていたバルオンが、静かに口を開いた。

「……ここにもすぐに敵が押し寄せるだろう…皆、今は堪えるのだ…。メコンに向かう。次の標的はあそこのはずだ。……行こう」

バルオンの言葉を聞いた男たちが、ノロノロと移動を始める。

その時。

「うおおおおおッ！！！！」

突然茂みから飛び出した一人の少年が、バルオンに飛び掛った。
タキである。

武器は既がない。

先程のサラン族に奪われてしまったのだろう。

しかし、怒りに我を忘れたタキには武器の有無などどうでも良いことだった。

「バルオオオオオオンッ！！！！」

咆哮を上げながら素手で殴りかかる。

が、握り締めたその拳はバルオンに届くことはなかった。

振り向きもせずに突き出したバルオンの槍の柄が、タキの喉を捉えたのだ。

「…ゲホッ…！！！」

グシャリ、と地に叩き付けられるタキ。
打ち抜かれた喉を押さえて転げ回る。

「クオース兵!？」

「こんな所にまで……!!」

駆け寄った男達の手によって、タキはあっさりと押さえつけられてしまった。

だが三人の男達に押さえ込まれながらも、なおも激しく抵抗を続ける。

「……ちくしょう!! 離せ!! 離せえええっ!!」

「この……! 大人しくしろ!!」

「こいつ……っ! ガキのくせになんて力だ!!」

男達が、さらに力を込めてタキを組みひしぐ。
まるで潰れた蛙のように地面にへばりつきながら、それでも顔を上げ、タキは毒づく。

「バルオン…！お前は…お前だけは…っ！許さないっ！！」

睨み付けるその顔は、とても子供のものとは思えない程、凄まじい形相である。

降りしきる雨の中、自分に向けて呪詛の言葉を吐き続けるその少年を、

大男はただ静かに見下ろしていた。

3

(4)

「肩の具合はどうだ？ まだ痛むか？」

草を編んで作られた柔らかなベッド。

その上に横たわるリコに、マサラは優しく問いかけた。

「大丈夫、大した傷じゃないから」

痛々しく巻かれた左肩の包帯に手を添えながら、リコは微笑んで見せた。

ここはメコンの集落。

五十人程のサラン族の家族が住んでいる小さな集落である。

村の青年マサラは、この集落で生まれ育った。

今年で十七歳になる。彼はこの村の若き集落頭で、族長バルオンの筆頭後継者でもある。

責任感が強く、人望もあった。

戦になれば誰よりも先に立って戦場へ赴き、必ず成果を上げる。

スラリとした長身に加え、竹を割ったような爽やかな性格。
この歳ですでに族長を継ぐだけの器を、彼は備えていた。

そんなマサラを、リコも兄のように慕っている。

族長の娘という事もあり、周囲から敬遠されてしまいがちな彼女を、マサラだけは

他の娘達と同じように接してくれた。

マサラもまた、リコを妹のように可愛がり、何かと世話を焼いているのだった。

「…今頃、援軍が到着しているはずだ。ヒサはきっと大丈夫だ」

マサラが、うつむくリコに励ましの声を掛ける。

本音ではない。

ヒサは既にクオースの手に落ちているだろう。

そして、そこにいたリコの母親を含む仲間達も恐らく…

それは現場から逃げてきた彼女自信が誰よりも分かっているはずである。

「うん…ありがとう」

弱々しくも気丈に微笑みを返すリコ。

泣いてはいけない。

皮肉にも、族長の娘としてのプライドだけが、今の彼女を支えていた。

夜も更け、雨上がりの空に顔を覗かせた月が、その輝きを増した頃。

にわかに外が騒がしくなった。

マサラとリコも、何事かと部屋から飛び出す。

族長バルオンが、仲間と共に村に到着したところだった。

村人達が歓喜の声を上げ、一年振りに帰還した戦士達を迎えている。

「父さま！」

「長！おかえりなさいませ！」

走り寄ってひざまずこうとする二人を、バルオンが制する。

「マサラ、リコ。留守中苦勞をかけたな」

「もったいないお言葉…長こそ遠征お疲れ様です」

頭を垂れるマサラに軽く頷いてみせ、リコに目を向ける。

「リコよ…辛い思いをさせたな…」

「…いえ…」

うつむき、短く答えたリコの声が震え、その頬からポロリ一粒、涙がこぼれた。

わずか十二歳の少女である。

一年振りの父との再会に安堵すると同時に、今まで押さえ付けていた感情が溢れてしまうのを我慢できなかった。

すすり泣くりコの頭を優しく撫で、しばらく二人を見つめていたバルオンだったが

すぐに村の中央へと進み、集まった人々へ話し始めた。

「…戦況は、我が軍が不利になりつつある」

静かに、しかし威厳のある族長の声に、村人達は固唾を吞んで聞き

入る。

リコとマサラも不安気に言葉の先を待つ。

「今日：ヒサの村がクオースの襲撃を受け、占拠された」

その言葉に、人々からどよめきが上がる。

マサラから大筋は聞いていたとはいえ、やはりヒサの陥落は村人達に衝撃を与えた。

やや間を置いて、バルオンは続けた。

「ヒサは壊滅し、我が妻を含む仲間達は皆：クオースの凶弾に倒れた…」

嘆きと、すすり泣きの声があちこちで聞こえる。

リコの顔が強張り、マサラがその肩にそっと手を添えた。

「このまま戦いが長引けば、我等は更に苦しい戦いを強いられる事になるだろう」

周囲の人々を順番に見渡し、バルオンはそこで再び言葉を切る。
固唾を呑んで見守る人々の頭上を、冷たい風が通り抜けた。

「だが！」

突然バルオンが声のトーンを上げる。

「愚かな侵略者達をこのままのさばらせておいてはならない！正義は我等にある！」

偉大なるヴァヌの加護がある限り、我等が滅する事はないのだ！」

その力強い響きに、オオーツと呼応する村人達。

リコとマサラも、夜空に高々と右手をかざし、天に報復と勝利を誓う。

バルオンはその様子を見て満足気に頷くと、後ろに控えていた男に何かを告げた。

男は一旦村の外へ走り出ると、しばらくして何かを肩に担いで戻ってきた。

「…あれは…」

リコとマサラが、顔を見合わせる。

男の肩に担がれていたのは、昼間リコを襲った、あの少年兵だったのだ。

「これは、先程私が捕らえたクオース兵だ」

バルオンが、男の肩の上でぐったりと動かないタキを指差し説明した。

途端、怒号が飛び交う。

「侵略者め!!」

「殺せ! 殺してしまえ!!」

「悪魔め! 村を返せ!! 仲間を返せ!!」

一瞬にして、村は殺伐とした空気に包まれた。

「ばかな奴だ…せっかく生かしておいてやったのに…」

マサラが小声でリコに囁く。

あの後。

意識を失い倒れたタキにとどめを刺すべく、マサラは短剣を振り上げた。

だが、リコがそれを止めたのだ。

何故止めたのか、リコ自身よく分からない。

故郷の村を焼き払い、愛する母も親しい友人も仲間達も、全てを奪った憎むべき

クオースの兵士。

あまつさえ彼女自身、この少年にもう少して命を奪われそうになったのである。

本来ならば真っ先に自分の手で殺してしまいたいであろうその相手を、しかしなぜか

彼女は憎む事ができなかったのだ。

少年の眩きが、リコの耳の奥に蘇る。

『殺らなきゃ殺られる…これは戦争なんだ！』

泥で汚れた、まだ幼さの残る顔。

憎悪の中に見え隠れする、深い悲しみの色。

そして…涙。

リコにはこの少年が『憎むべき侵略者』だとは、どうしても思えなかった。

むしろ、自分と同じ『被害者』のように感じた。

そしてマサラも、そんな彼女の思いを酌んだのであろう。
何より、いくら憎むべき敵国の兵とはいえ、まだ年端もいかぬこの
少年を手にかけて
しまう事に、少なからず抵抗を感じていたのである。

「ちっ、仕方ないな」

それだけ言うと、タキにとどめを差すことなく、二人はその場を後にしたのであった。

そんな経緯で、せっかく見逃してやった少年が、今二人の前にいる。
担がれた男の肩の上でぐったりとしているタキに、リコがぎゅっと
マサラの腕を掴んだ。

「マサラ…あの子…死んでるんじゃない…」

微動だにしないタキの様子に、心配そうな声を出す。

まったく。

どこまでお人好しなんだか。

半ば呆れながらも、マサラはそれが彼女の良いところなのだと思います。

直し、安心させるように
言った。

「いや、死んではないよ。気絶しているだけだ。ほら」

彼の言葉どおりタキの体は呼吸している、つまり生きている証として、静かに上下している。

「…恐らく、捕虜として扱われる事になるんだろう。まあ…」

まあ、生き地獄を味わう事にはなるのだろうか。

言いかけた言葉を辛うじて飲み込み、リコを見た。

安堵の表情を浮かべる彼女とは対称的に、なぜかマサラは得体の知れない不安を感じていた。

（この少年が再び僕等と出会ったのは、何を意味する…？）

夜空を見上げると、怪しい輝きを増した月が静かに自分達を見下ろしていた。

その頃。

占領したヒサの村に帰還したタキ搜索隊は、この時を以ってその任務を終了した。

搜索は打ち切られたのである。

第一章 完

(1)

「…ルーシア!!」

自分の叫び声で、カリムは目を覚ました。

背中が、汗でぐっしりと濡れている。

ドクドクと早鐘のように鳴る心臓を押さえて、ゆっくりとベッドの上の上体を起こす。

「…また、あの夢か…」

震える手を伸ばし、横にあるテーブルの上に置いてあった水の入ったカップを持つと、一気に飲み干した。

クオース軍兵士宿舎。

首を回し枕元に置かれた時計を見ると、午前三時を少し回った所だ

った。

真っ暗な部屋の中、深い溜息を突きながら、カリムはがつくりとなだれる。

何度目だろう、あの夢を見るのは。

「…ルーシア…」

ポツリ、と再びその名を呟く。

ルーシアⅡエイジス。

半年前に戦場で死んだ彼の上官で、タキの兄である。

実直な男だった。

カリムより一つ年上の二十七歳。

正義感に溢れ、実戦経験も豊富で部下からは慕われていた。

嘘が嫌いで、思った事をハキハキと言う、気持ちの良い人物だった。

ルーシアはカリムの数少ない理解者であり、良き上司にして好敵手でもあった。

だが。

別れは、ある日唐突にやってきた。

あの日。

当時まだ伍長であつたカリムは、クオース軍第三中隊の中佐ルーシアと共に、

激戦地でサラン兵の主力部隊と一進一退の攻防を繰り返していた。

大量の血で赤黒く染まった大地には無数の屍が転がり、空は連日黒煙で覆われ、

肉食の猛禽類が屍を食い漁っていた。

異臭が鼻を突き、原因不明の病に幾多の戦友達が倒れた。

地獄絵図のような戦場を昼夜休まず攻め続け、ようやく戦況を有利に傾けた頃だった。

鬱蒼とした藪やぶの中に、カリム達はサラン軍の一団を追いつ込んでいた。大振りのサバイバルナイフを構え、逃げる一団を追跡するルーシアとカリム以下、十数名の部下達。

開けた場所では絶大な威力を誇る剣銃も、この狭い場所では小回りが効かず、上手く扱う事ができないのだ。

もう少しで各方面に散った別働隊との包囲網が完成すると思われた、その時。

彼等の前に、一人の男が立ち塞がった。

巨大な槍を構え、黄金色に輝く羽飾りを頭に差したその男は、次の瞬間気合と共に
手にした槍を真一文字に薙ぎ払った。

四人の兵士が、宙を舞った。

まるでスローモーションのようにカリム達の頭上を超え、更に数メートル後方の地面に
叩き付けられる。

即死していた。

カリムの背中を、ゾクリと悪寒が走る。

『密林の悪魔』バルオンが、二人の目の前に立っていた。

その直後、遠方から微かに仲間達の悲鳴が上がったのが聞こえた。

「しまった！伏兵か……！！」

退却したと思われたサラン軍は、この藪やぶの中に味方の兵を伏せていたのである。

包囲されていたのはカリム達の方だった。

「撤退だ！全軍退却……！！」

素早くルーシアが指示を出す、既に遅かった。

クオース軍は合流する手前で待ち伏せていたサラン兵達によって各

個撃破されていた。

この密林は、サラン族にとって庭のようなものである。地形的不利に加え、カリム達の装備であるナイフではサラン族の長槍には勝てない。

背中に背負った剣銃も、この藪では邪魔になるだけである。

周囲からクオース兵達の絶叫が聞こえてくる。

「くそっ…！どうする、ルーシア！」

じりじりとにじり寄るサラン兵達をナイフで牽制しつつ、カリムがルーシアに指示を求める。

このままでは、全滅する。

もはやこれまでかと、カリムが覚悟を決めたその時。

「行け。俺が退却路を開く」

ルーシアが低く囁いた。

「…なに？」

「カリム。君達はなんとしても生き延びて国に戻り、戦況を伝えてくれ」

「ルーシア…？」

一瞬、その言葉の意味が理解できず、困惑するカリム。

「俺が囷になって敵を引き付ける。君達はその隙に包囲網を突破して援軍を呼ぶんだ」

何を言っている…？

カリムは耳を疑う。ルーシアは、自分が一人この敵の大軍勢の中に残る、と言っているのだ。

ようやくその意味を理解した脳が、カリムの体を凍りつかせる。ルーシアはカリムの目を見据え、覚悟の表情で告げた。

「いいか、これは命令だ。…逃げろ！」

「嫌だ！！俺も戦う！！」

カリムが吠えた。

ルーシアはここで犠牲になって死ぬ気だ。

「嫌だ…嫌だっっ!!」

カリムは必死に命令を拒む。

途端、ルーシアは思い切りカリムの頬を殴った。

「バカヤロウ!! ガキみてえな駄々こねてんじゃねえ!!」

その迫力に一瞬、目を丸くして固まるカリム。

ガシリ、とその両肩を掴み、今度は優しく諭すように続けるルーシア。

「お前がしっかりしなきゃ、誰がこの部隊をまとめていけるんだ…」

ルーシアの瞳には揺るがぬ決意の色が満ちていた。

もう…引き留められない。

本能的に、カリムは悟る。

「カリム…いや。カリムⅡスレイン伍長。ただ今より君に、クオース軍第三中隊の全指揮権を託す。即刻全軍を退却させ、生き延びよ！！」

そう言うと、ルーシアは腕に縫い付けられていた勲章を剥ぎ取り、カリムの手に握らせた。

カリムの頭を、ルーシアと部下達の顔が交互に駆け抜ける。

涙が溢れ、目の前のルーシアの顔がグニャリと歪んだ。

泣きながら、最敬礼を取るカリム。この瞬間、彼はクオースの指揮官となった。

生きて、帰らなければならない。

戦果を待っている国民の為に。

多くの仲間達の命の為に。

何より…自らを犠牲にして自分達を逃がそうとする、この男の為に。

槍を構えたバルオンが、目前に迫っている。

ナイフをかざしたルーシアがバルオンに向かって走り出す。

走りながら、ルーシアは叫んだ。

「カリム！タキを頼む！あばよ！！」

突然走り出したクオースの指揮官に、サラン族がいつせいに飛び掛

る。

「全軍退却！！俺に続けええつつ！！！！」

カリムが叫び、ルーシアに背を向けて走り出す。

必ず、生きて帰る。

走りながら後ろを振り返ったカリムの瞳に、バルオン目がけてナイフを振り下ろすルーシアと、その身体を槍で貫く『密林の悪魔』の姿が焼きついていた。

(2)

「俺を、軍に加えて下さい」

タキがカリムにそう言ったのは、遺体なきルーシアの葬儀が終わった夜の事だった。

その日、終始無言で兄の遺影が納められた棺を見つめていた彼の第一声が、その一言であつた。

「タキ…」

困惑するカリム。

ルーシアの魂を納めた棺は、厳かに土に還された。

葬儀には大勢の弔問客が参列し、国の危機を救った偉大な英雄との別れを惜しんでいた。

サアサアと振る霧雨の中、タキの頬を伝っているのはまるでただの雨のようにも見えた。

「タキ、気持ちは分かるが…」

軍に加えるわけにはいかない。
約束したのだ。タキを守る、と。

「受け入れてもらえないのなら、俺一人でも行きます」

硬い意思の秘められた彼の言葉に、カリムは絶句する。

放っておけば、この少年は本当に一人で敵地へ乗り込んでしまうだろう。

しばし無言で見詰め合う二人。

「…分かった。入隊を認めよう。ただし…」

しばらくの沈黙の後、カリムが重い口を開く。

「軍に入る以上、上官の命令には従ってもらう。もしも勝手な行動を取った場合は軍議にかけ厳罰を処した後、直ちに隊を追放するぞ。どうだ、約束できるか？」

コクリと頷くタキ。

その決意に満ちた顔を見て溜息をついたカリムであったが、すぐに

厳しい表情を作り言い渡した。

「よろしい。タキⅡエイジス。クオース軍第三中隊への入隊を許可する。詳細は追って説明する。出発の準備をしておくように。以上！」

ピシリと敬礼の姿勢を取るタキの姿は、本当にこれが初めて軍隊に入る少年かと思えるほど様になっていた。

(3)

「タキ…」

薄暗い寝室の中、ベッドに腰掛けたまま、カリムは何度目ともしれぬ溜息を突いた。

時計に目をやると、針は午前四時を指していた。

(無事でいてくれ…)

祈るような気持ちで窓の外を見る。

既に月明かりはなく、時折チカチカと瞬く星の輝きだけが、真っ暗

な夜空を僅かに彩っていた。

今日中に帰ってこなければ、敵に捕獲されているか、あるいは：

ブルツと身震いして、カリムは堅く目を閉じた。

考えたくもないのに最悪の想像が脳裏をよぎる。

こんな立場でなければ、今すぐにでも外へ飛び出してタキを探しに
いつているところだ。

「無事で…いてくれ…」

組んだ両手を額に押し当て、もう一度祈るように呟く。

戦争は嫌いだ。

国家の我侭に付き合わされて犠牲になるのは、いつも何の罪もない
人々である。

何も生まれない。

生まれるとすれば、憎しみと悲しみだけだ。

そして、その憎しみと悲しみだけがいつまでも色褪せることなく、

タキのような子供達の

世代へと受け継がれてゆく。

決して癒える事のない、傷跡だけを残して。

クオースは雄大な国ではあるが、豊かな国ではない。

国土の大部分を占める不毛の大地に作物はあまり実らず、険しい山
脈を背に三方を他国に

囲まれ、常に領土を狙われている。

人工の多さが貧困に拍車をかけ、貧しい国民が生き延びるには軍に入り他国を侵略して糧を得るしかない。

クオースもまた、生存する為に必死なのである。

サラン族が有する土地は肥沃で広大だった。気候も穏やかで、彼の地を獲ることはすなわち、

クオースの民を救うことに繋がる。

そのために戦うのである。

そこに住む先住民達の、尊い命を奪って。

カリムは貧しい家の出身であった。

両親は故郷で細々と商売をしているが生活は苦しく、カリムを含む三人の兄弟達も、七歳になると軍事学校へ入れられ厳しい訓練を経て軍人となった。

戦場で名を上げ昇格すれば、多大な恩謝が与えられ、家族を養うことができるからだ。

だが、二人の兄は四年前に戦死した。

カリム自身も幾度となく生死の境を渡り歩き、一年前ようやく伍長に昇格した。

ルーシアに出会ったのもこの時である。

ほどなく今回の侵略戦争が始まり、現在に至る。

今や中尉という地位にあるカリム。異例の昇格を遂げた彼だが、そ

の代償はあまりにも大きなものだった。

皮肉なものである。

人を救うために、人を殺さなければならぬのだから。

戦争に正義などない。

今の彼にできることは、一日でも早く、また一人でも双方の犠牲者を少なく、この戦争を終わらせる事だけである。

「…やはり、戦争は嫌いだ」

一人ごちた後で、力なく笑う。

戦争が好きな人間など、いるものか。

「…タキ…」

三度その名を呟いたカリムが目を開けると、東の空は既にうつすらと白み始めていた。

また、戦いが始まる。

のそりとベッドから降りると、カリムはやりきれない気持ちのまま、冷たい軍服に袖を通した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4916d/>

滅星児

2010年12月5日10時38分発行